

はがき新聞を用いた防災学習の授業実践

Lesson Practice of Disaster Prevention Learning Using a Postcard-Newspaper

奥田 雅史 木村 憲喜
OKUDA Masashi KIMURA Noriyoshi
(堺市立金岡南中学校) (和歌山大学大学院教育学研究科)

2022年7月17日受理

抄 録

最近、異常気象や地震など人々に強く影響をおよぼす自然現象が多く起きている。今回、防災意識を向上させ、災害を減らすことを目的に「はがき新聞」を用いた防災学習を試みた。この授業実践により、災害を身近なこととしてとらえることができ、防災対応力を高められることがわかった。

We performed the education of disaster prevention for abnormal weather and earthquake writing newspaper of postcard size. From this practical education, it was clear that junior high school students could easily recognize disaster in our life and acquire strong consciousness for disaster prevention.

1. はじめに

政府地震調査研究推進本部¹⁾によると、大阪市において今後30年以内に震度6弱以上の激しい揺れに襲われる可能性が26%以上あるとされ、地震に対する備えは現代社会における課題であると言える。また、昨今は台風やゲリラ豪雨などの異常気象や暑さによる熱中症などさまざまな災害に対する備えも必要であると考えられる。

著者の一人（奥田）も2018年度から理科の授業を中心に、特別活動である部活動と関連させた防災学習の実践を行ってきた。その結果として、生徒の防災意識を大きく向上させることができたと思われる²⁾。

一方、学校現場では教員の多忙化により、総合的な学習の時間や特別活動などの教材研究に割く時間が取れないことも少なくない³⁾。このことから、経験の少ない教員でも手軽に行ってみようと思えるような「はがき新聞」を用いて、防災学習を1校時の時間でできるような授業実践を試みた。

2. はがき新聞

はがき新聞とは理想教育財団が発行しているもので、はがきサイズやそれより少し大きなサイズで、新聞形式の原稿用紙を使った作文用紙である。新聞形式で、相手意識と目的意識を持たせたコンパクトな作文なので、生きた言語活動としてさまざまな場面で活用できる。そして、見出しを考えることで作文をまとめる力もつく⁴⁾とされているものである。

奥田もこのはがき新聞を用いて、前任校で平成27年

度に理科の授業で実践を行い、生徒の「思考力・判断力・表現力」を身に着けさせることができた⁵⁾。さらに、当時は若い教員が多い学年であったにも関わらず、その手軽さから英語科・国語科・数学科や総合的な学習の時間など多くの教科で活用することができ、生徒の学びに効果的に使用することができた⁶⁾。

3. 実践の目的

防災教育の必要性はいままでもないが、本校は世界遺産「大仙古墳」よりさらに山側に位置し、堺市のハザードマップにおいても、地震や津波の危険性が低い場所とされ、内外水害においても危険性が比較的低い場所である。これらのことから、現在の学校における防災教育は教育課程に位置付けられておらず、総合的な学習の時間などは学年裁量で、教科においては教科担当の裁量において行われているのみである。そして、本校は大阪880万人訓練も実施されていないのが現状である。

一方で、地域の自治会などの防災意識は高く、夏休みに小学校で1泊2日の防災キャンプを行ったり、別の小学校区では冬に防災フェアを行うなど盛んに防災についての取り組みを行っている。

そこで、奥田は理科の授業において、1校時で行えるコンパクトな「防災はがき新聞」を使った授業を行い、クラスメートや保護者とのつながりを意識することで、中学校の学習と自治会など地域の防災教育とをつなげる試みを行った。

4. 実践の概要

本実践は、かねてからご指導いただいている日本新聞協会NIEコーディネーター 関口修司氏が監修し、作成いただいた「防災はがき新聞」⁷⁾の授業デザイン案をもとに、奥田が次のように授業デザインを作成した。

CROSSROADとは、慶応義塾大学商学部 吉川肇子氏が作成し、阪神・淡路大震災で、災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成された、

カードゲーム形式の防災教材である。「この食糧を配るか配らないか」など、どちらを選んでも何らかの犠牲を払わなければならないような「ジレンマ」が多数あるものである⁸⁾。

これを奥田が本校の生徒が想像しやすいように内容を少し改変して「金岡南中CROSSROAD」として、授業を行った。

学習内容・教師のはたらきかけ (★)	予想される生徒の反応
1. 【導入】「今日(昨日・明日)は何の日？」	
<p>★単刀直入に今日は何の日かと生徒に尋ねる ※9月2日～10日の間で8クラス実施 何もない日常だからこそ、防災について考える機会としてほしい</p>	<p>・「防災の日」(9月1日) ・「大阪880万人訓練」(9月5日) ・「救急の日」(9月9日) など</p>
2. 【展開1】「地震の被害について知る」	
<p>★「阪神淡路大震災」や「東日本大震災」などを例にあげ、地震の被害について伝える ★「南海トラフ地震」が起こる場所や確率について ※理科の「地震」についての学習は2学期の予定 ●親や祖父母など経験した話などあれば、取り上げる。 肉親が被害にあったなど、トラウマに細心の注意を払う</p>	<p>・南海トラフは聞いたことある。 ・防災グッズ用意してる！ ・親が神戸に出張中だった！ ・大阪でも揺れたって聞いた ・昔、神戸に住んでた！</p>
2. 【展開2】金岡南中 CROSSROAD を行う	
<p>★災害時のジレンマをカード化した CROSSROAD をオリジナルで作成したものを→</p>	<p>あなたは、いつもの1日が終わり、ぐっすり眠っていました。その時、恐れていた大地震が発生。2分ほど激震に襲われ、家は全壊。あなたは、どうにかはい出して、逃げようとしていた。するとあなたの大切な人の手が、ガレキの中から出てきて、「助けて！」と声がする。しかし、引っ張り出そうにも出てこない。あなたの家は、地震により出火し、逃げなければ自分も死んでしまうかもしれない。 A: あなただけ逃げる。 B: 一緒に家に残る</p>
<p>●決めるのが難しい生徒もいると想像できるが、あくまで練習なので、頑張っ「決断」するよう促す ●4人班で意見を交流したのち、全体交流をする</p>	<p>・自分だけでも逃げる ・ダメと分かっているでも残ってしまう。 ・難しく、決められない。</p>
3. 【まとめ】「はがき新聞」で振り返る	
<p>★はがき新聞に、今日の授業を通して感じたことなどをもとに、どのように行動すべきかを考えさせて、記入させる ※最後に、宿題としてはがき新聞の裏面に保護者の感想を書いてもらうよう指示し、提出してもらう。</p>	<p>CROSSROAD についても家庭で話してもらおうよう合わせて支持する</p>

図1: 本実践の授業デザイン

5. 実践の成果

生徒が作成したはがき新聞の一部を図2から図5に示す。

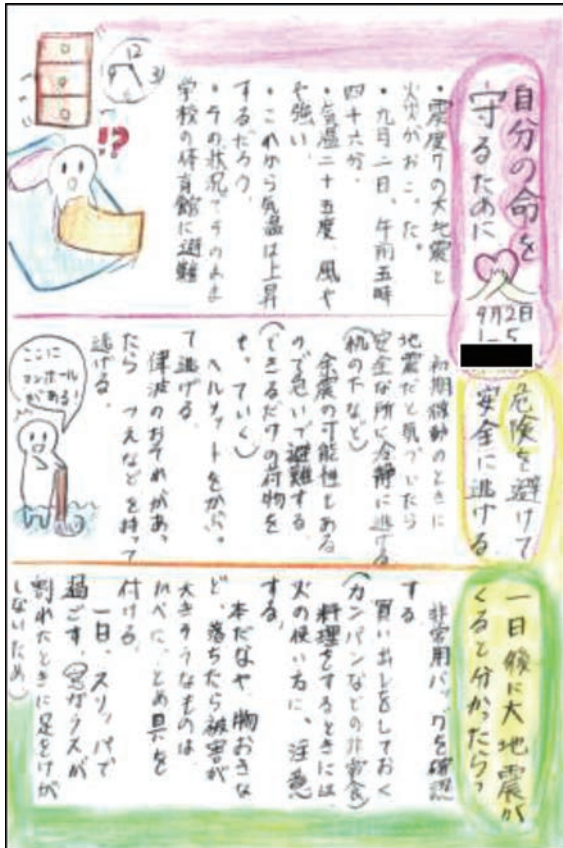


図2：生徒が作成したはがき新聞(1)

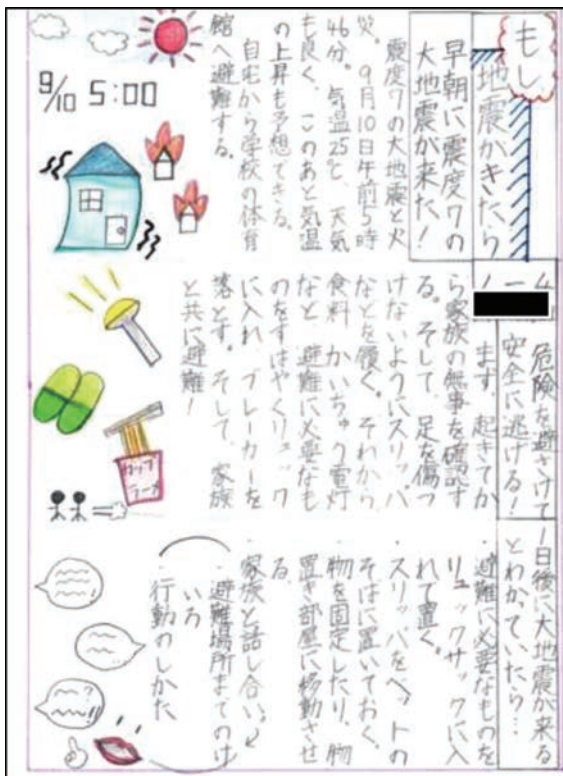


図3：生徒が作成したはがき新聞(2)

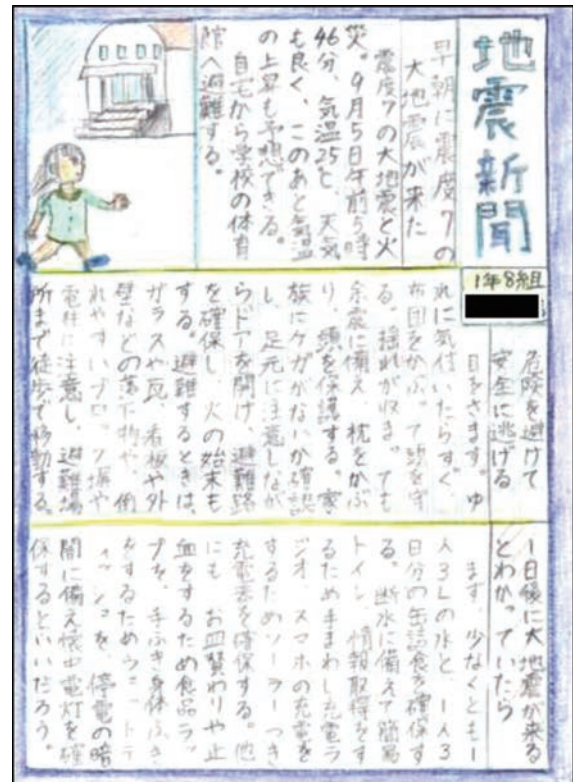


図4：生徒が作成したはがき新聞(3)



図5：生徒が作成したはがき新聞(4)

これらのはがき新聞から、どのクラスの生徒もはがき新聞を用いることでコンパクトに防災に関する考えをまとめることができたと思われる。また、文章を書くのが苦手な生徒もイラストなどを用いることで自分の想いを表現することができていると考えられる。

さらに、2段目の部分には、もし生徒自身が被災したらということをしかり想像して書くことができていることから、金岡南中CROSSROADを用いたことで、災害を身近なこととして捉えることができたと考えられる。

次に、保護者の感想を示す。

◇文章を読んで、「もし、自宅で過ごしているときに大地震が起きたら…」とリアルに想像しました。日頃の備えが本当に大事だなと感じました。

◇地震があったその時は、防災意識が高くなるが、時間の経過とともに防災意識が薄れがちになってしまうことが多い中、活字で書きだすことは、自身への注意喚起も促せる良いテーマだったと思います。

◇地震に対しての備えはある程度していますが、「明日必ず地震が来る」という前提で考えたことがありませんでした。明日必ず来るとなるとすごくリアルに考えたり、しっかりきめて準備しておくことが大事だなと、子どもと一緒にできて良かったです。

◇おじいちゃん、おばあちゃんのことにも気づかい、心配してくれて優しいなと感じました。先日、自助・共助の話をしたのですが、まずは自分の安全を確保して助け合いの気持ちを忘れないでほしいと思います。防災について家族で、今一度話し合いを持ちたいと思いました。

◇家族が一緒にいる時に地震が来たら、一緒に避難することができるけど、家族が離れているときに、一人ひとりがどのように行動し、連絡を取り合ったら良いか、改めて話し合おうと思いました。自分の命を大切に作る行動をとってほしいです。

◇夏休みに野島断層を見学して、震度7の揺れを体験したので、地震の怖さを体験できたと思います。我が家は備えが不十分なので、家族で話し合わないといけないですね。

◇阪神大震災の時、今までにないゆれにすごく恐怖を感じたことを覚えています。実際にその時、頭を隠すことすらできず、身動き一つとれませんでした。ここ最近災害が多く、被災された方をテレビで見ていると自分たちも災害に対する備えをしなければ…と思うのですが、結局時間がたつとともに忘れてしまっています。この新聞を読んでみて、あらためて日頃から家族で災害の時どうするか話し合うことが大事だと思います。

◇阪神大震災の時、神戸にある大学に自宅から通っていて、下宿の友人達が窓や玄関が壊れて出れなくなっていたことや、ほとんど何も持たずに逃げた話を思い出して、改めてこのような授業をしていただき、防災を考えるきっかけになったと思います。ありがとうございました。

◇地震はいつ起こるかかわからないのが最大の問題だと思います。いつ来るかわからないものに対してどう備えるかという視点が入ればもっとよかったと思います。ただ、避難時に必要なのは「決断力」と考えているのはその通りだなと思います。これからも折に触れて、考えてほしいです。

生徒のはがき新聞の3段目の記述は、保護者と相談の上、記入している生徒がほとんどであるため、家庭でしっかり話して、生徒自身のこととして捉えることができていたと考えられる。

関口氏は「はがき新聞の完成度も高いうえに、今回は保護者も巻き込んで記録にまとめたことが、素晴らしいです。防災教育はなくなることはありません。益々重要度が増していきます。無理せず地道に拡げてください。今後も楽しみにしております。」と評価いただいた。

6. 成果と課題

最後に、本実践は以下のような成果があったと考えられる。

- 1時間限りでできるので、今後も実践しやすいと考えられる。
- 映像や写真に加えCROSSROADでリアルに想像させられた。
- はがき新聞で簡単に思いや考えを文章にすることができた。
- 保護者に見ていただくことで、授業が伝わった。
- 授業が伝わることで、家庭での防災に拡がった。
- 新聞を掲示することで、学校内でさらに拡がった。

今後、本研究を多くの教員に実践していただき、最終的には防災教育を教育課程に位置付け、転勤などで教員が入れ替わっても同じように実施できるようなシステムの構築が必要であると思われる。

参考文献

- 1) 政府地震調査研究推進本部地震調査委員会, 全国地震動予測地図2020年版.
- 2) 奥田雅史, 吉川武憲(2020), SDGsの理念を生かした理科

- 部防災研究班の活動とその活性化, 近畿大学教育論叢, Vol.32, p.127-p.143.
- 3) 奥田雅史(2017), 仲間とつながれることのできる力を養う生徒会活動, 日本特別活動学会紀要, Vol.25, p.57-p.65.
 - 4) 理想教育財団ウェブページ, https://www.riso-ef.or.jp/hagaki_top.html (2021年10月20日閲覧).
 - 5) 奥田雅史(2017), 主体的・協働的に思考力・判断力・表現力を身に着けさせる理科「はがき新聞」, 公益財団法人日本教育公務員弘済会大阪支部2016年度教育実践研究論文.
 - 6) 杉浦健, 奥田雅史(2017), そもそもカリキュラムマネジメントとは?—美原中学校におけるカリキュラムマネジメントから考える—, 近畿大学教育論叢, Vol.29, p.49-p.70.
 - 7) 理想教育財団ウェブページ, https://www.riso-ef.or.jp/bousai-hagaki_top.html (2021年10月20日閲覧).
 - 8) 災害対応カードゲーム教材「クロスロード」(減災への取組), <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19005.html> (2021年10月20日閲覧).